

話の分節

三 節 尾

節分は古はせちぶん又略してせちぶと稱したりしが、近世はせつぶんと稱せり、立春立夏立秋立冬の前日を節分と云ひ、一年四回なりしが、後世は立春の前日をのみの稱となり、朝廷にては近世節分の夜御祝あり、武家にては、足利幕府の時より恒例の行事となれり、此夜豆をまきて、福は内鬼は外と稱へて、惡鬼を驅逐するは、往古十二月晦日の夜禁中にて行ひし、追儺の儀式を模倣せしならん、徳川幕府にては福は内くと二抓、中音にて二聲、鬼は外と一抓、大音にて一聲唱へ、九鬼家にては、節分の夜は、主人惠方に向ひ、坐に就き、年男豆を持出、鬼は内福は内富は内と唱へて一豆を主人に打つけ、次の間にては、鬼は内福は内鬼は内と唱へり、朝廷にては古は勾當内侍、御豆を主上の御年の數、鳥目御との數を、引合と云ふ紙一かさねに包み、御やく拂と稱して、御前に持ちて来るを、主上其やく拂を以て御身を撫でられて返さる、勾當内侍給はりて、後を顧みざるやうにして退くなり、民間にては豆撒きの豆を拾ひて己の年齢の數に一箇を加へて厄拂と稱し街上を行く者に與へ、祝壽驅邪の詞を唱へしむ、其唱句に魚盡し橋盡し其他種々あり、厄拂は大朔日、正月六日、十四日等にも來れども、豆を與ふるは節分の夜のみなり、今日民間にては門戸に格及び鰯を挿む慣習あり、是れ又厭勝の爲めなり、節分の慣習漸次衰へゆくは時代のしからしむる所なれど、邪を驅ひ吉を招くの行事は、人心を新たにするの利あれば、存したきものなり。